



羅生門 (**rashoumon**)
Akutagawa, Ryūnosuke

Published: 1915

Categorie(s): Non-Fiction, Philosophy, Psychology, Fiction, Short Stories

Source: http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/127_15260.html

About Akutagawa:

芥川 龍之介（あくたがわりゅうのすけ、1892年3月1日 - 1927年7月24日）は、日本の小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼を用いた。その作品の多くは短編で、「芋粥」「藪の中」「地獄」「車」など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。

「蜘蛛の糸」「杜子春」など、童話も書いた。1927年7月24日未明、友人にあてた遺書に「唯ぼんやりした不安」との理由を残し、服毒自殺。

35歳という年齢であった。後に、芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。戒名は懿文院龍之介日崇居士。Ryūnosuke Akutagawa (芥川 龍之介, Akutagawa Ryūnosuke) (March 1, 1892 - July 24, 1927) was a Japanese writer active in Taishō period Japan. He is regarded as the "Father of the Japanese short story", and is noted for his superb style and finely detailed stories that explore the darker side of human nature. (source: Wikipedia, English/日本語)

Also available on Feedbooks for Akutagawa:

- 鼻 (*hana*) (1916)
- 藪の中 (*yabu no naka*) (1922)

Copyright: This work is available for countries where copyright is Life+70 and in the USA.

Note: This book is brought to you by Feedbooks

<http://www.feedbooks.com>

Strictly for personal use, do not use this file for commercial purposes.

ある日の暮方の事である。一人の下人（げにん）が、羅生門（らしょうもん）の下で雨やみを待っていた。

?い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗（にぬり）の剥（は）げた、大きな?柱（まるぼしら）に、蟋蟀（きりぎりす）が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路（すざくおおじ）にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠（いちめがさ）や揉烏帽子（もみえぼし）が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか?風（つじかぜ）とか火事とか饑饉とか云う災（わざわい）がつづいて起った。そこで洛中（らくちゆう）のさびれ方は一通りではない。旧記によると、?像や?具を打?いて、その丹（に）がついたり、金銀の箔（はく）がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪（たきぎ）の料（しろ）に?っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸（こり）が棲（す）む。盗人（ぬすびと）が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも?味を?るがって、この門の近所へは足ふみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉（からす）がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾（しび）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕?けであかくなる時には、それが胡麻（ごま）をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄（ついば）みに来るのである。——もともと今日は、刻限（こくげん）が?いせい、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞（ふん）が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖（あお）の尻を据えて、右の?に出来た、大きな面皷（にきび）を?にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしよう云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ?る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微（すいび）していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、?はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人

が、行き所がなく、途方にくれていた」と云う方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申（さる）の刻（こく）下（さが）りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日（あす）の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した薨（いらか）の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる違（いとま）はない。選んでいれば、築土（ついじ）の下か、道ばたの土の上で、餓死（うえじに）をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊（ていかい）した揚句（あげく）に、やっこの局所へ逢着（ほうちゃく）した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人（ぬすびと）になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇（ゆう）が出ずにいたのである。

下人は、大きな（くさめ）をして、それから、大儀（たいぎ）そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶（ひおけ）が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗（にぬり）の柱にとまっていた蟋蟀（きりぎりす）も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸（くび）をちぢめながら、山吹（やまぶき）の汗衫（かぎみ）に重ねた、紺の襖（あお）の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患（うれえ）のない、人目にかかる惧（おそれ）のない、一（ひと）にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の（あし）の、これも丹を塗った梯子（はしご）が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄（ひじりづか）の太刀（たち）が鞘走（さやばし）らないように（か）をつけながら、藁草履（わらぞうり）をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の（あし）の梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子（ようす）を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、

その男の右の?をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿（うみ）を持った面皰（にきび）のある?である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括（くく）っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛（くも）の?をかけた天井裏に、?れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮（やもり）のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平（たいら）にしなから、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗（のぞ）いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸（しがい）が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範?が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事?さえ疑われるほど、土を捏（こ）ねて造った人形のように、口を開（あ）いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくろがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に?（おし）の如く?っていた。

下人（げにん）は、それらの死骸の腐爛（ふらん）した臭?に思わず、鼻を掩（おお）った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅?を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲（うずくま）っている人間を見た。檜皮色（ひわだいろ）の着物を着た、背の低い、?

（や）せた、白?頭（しらがあたま）の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片（きぎれ）を持って、その死骸の一つの?を覗きこむように眺めていた。?の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時（ざんじ）は呼吸（いき）をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身（とうしん）の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に?して、それから、今まで眺めていた死骸の首に?手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱（しらみ）をとるよ

うに、その長い?の毛を一本ずつ?きはじめた。?は手に?って?けるらしい。

その?の毛が、一本ずつ?けるのに?って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に?するはげしい憎?が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に?すると云っては、語弊（ごへい）があるかも知れない。むしろ、あらゆる?に?する反感が、一分?に強さを?して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、餓死（うえじに）をするか盗人（ぬすびと）になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の?を憎む心は、老婆の床に?した松の木片（きぎれ）のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の?の毛を?くかわからなかった。?つて、合理的には、それを善?のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の?の毛を?くと云う事が、それだけで既に許すべからざる?であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる?でいた事などは、どうに忘れていたのである。

そこで、下人は、?足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄（ひじりづか）の太刀に手をかけながら、大腿に老婆の前へ?みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩（いしゆみ）にでも?（はじ）かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞（ふさ）いで、こう罵（ののし）った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭（ね）じ倒した。丁度、?（にわとり）の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘（さや）を?って、白い鋼（はがね）の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は?っている。?手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球（めだま）が眶（まぶた）の外へ出そうになるほど、見開いて、?のように執拗（しゅうね）く?っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を

意識した。そしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎みの心を、いつの間にか冷ましてしまった。後（あと）に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが??に成就した時の、安らかな得意と?足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己（おれ）は?非違使（けびいし）の?の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に?（なわ）をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の?を見守った。眶（まぶた）の赤くなった、肉食鳥のような、?い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも?んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉?（のどぼとけ）の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉（からす）の啼くような声が、喘（あえ）ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この?を?いてな、この?を?いてな、鬢（かづら）にしようと思つたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そして失望すると同時に、また前の憎みが、冷やかな侮蔑（ぶべつ）と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その?色（けしき）が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い?け毛を持ったなり、?（ひき）のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人（しびと）の?の毛を?くと云う事は、何ぼう?い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、?を?いた女などはな、蛇を四寸（しすん）ばかりずつに切つて干したのを、干魚（ほしうお）だと言うて、太刀?（たてわき）の陣へ?りに往（い）んだわ。疫病（えやみ）にかかつて死ななんだら、今でも?りに往んでいた事である。それもよ、この女の?る干魚は、味がよいと云うて、太刀?どもが、欠かさず菜料（さいりよう）に買っていたそう。わしは、この女のした事が?いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も?い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであら。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘（さや）におさめて、その太刀の柄（つか）を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く?に膿を持った大きな面皰（にきび）を?にしなが、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇?が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇?である。そうして、またさつきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇?とは、全然、反?な方向に動こうとする勇?である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が完（おわ）ると、下人は嘲（あざけ）るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰（にきび）から離して、老婆の襟上（えりがみ）をつかみながら、?みつくようにこう云った。

「では、己（おれ）が引剥（ひはぎ）をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五?を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色（ひわだいろ）の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白?（しらが）を倒（さかさま）にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、?洞々（こくとうとう）たる夜があるばかりである。

下人の行方（ゆくえ）は、誰も知らない。

大正四年九月

Loved this book ?
Similar users also downloaded

Ryūnosuke Akutagawa

藪の中 (*yabu no naka*)

"In a Grove" is an early modernist short story consisting of seven varying accounts of the murder of a samurai, Kanazawa no Takehiro, whose corpse has been found in a bamboo forest near Kyoto. Each section simultaneously clarifies and obfuscates what the reader knows about the murder, eventually creating a complex and contradictory vision of events that brings into question humanity's ability or willingness to perceive and transmit objective truth. It is the basis for Kurosawa's "Rashoumon."

『藪の中』（やぶのなか）は、芥川龍之介の短編小説。1922年（大正11年）、月刊雑誌「新潮」1月号に掲載された。

(from Wikipedia)

Note: you may have to embed your own Japanese unicode font in order for this to display on your reader.

A translated version is available: <http://www.feedbooks.com/book/4205>

Ryūnosuke Akutagawa

鼻 (*hana*)

Zenchi Naigu is a Buddhist priest during Japan's Heian period. He is ascribed the "wisdom of zen", but is more concerned with diminishing his ungainly, large, and dangling nose. The story is mainly a commentary on vanity and religion, in a style and theme typical to Akutagawa's work.

「鼻」（はな）は芥川龍之介による初期の短編小説。1916年に『新思潮』の創刊号で発表された。『今昔物語』の「池尾禅珍内供鼻語」および『宇治拾遺物語』の「鼻長き僧の事」を題材としている。「人の幸福をねたみ、不幸を笑う」と言う人間の心理を捕らえた作品。この小説で夏目漱石から賞賛された。

(from Wikipedia)

Note: You may need to embed a Japanese unicode font into this file in order to view it on your reader.



www.feedbooks.com
Food for the mind